満月の騎士　～死んでも死にきれないんだよぉ！～

雨月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
満月の騎士　～死んでも死にきれないんだよぉ！～

【Ｎコード】
Ｎ３２９６Ｊ

【作者名】
雨月

【あらすじ】
青白く、半透明の身体で宙に浮いていた……十時零時は考える。
あれ？人間って空中に受けたっけ？そして彼は徘徊を開始するのであった……

第一話◆：青白くて半透明、ついでに宙に浮いてます。

第一話

目が覚めたら真っ暗な場所で、フラフラ歩いていると窓から落ちた。どうやら、夜のようで大きな満月が暗闇に浮かんでいる。そして、次の瞬間にはまっさかさま……

あ、あぶないっ！！きっと、誰かが見ていたらそう思っていただろう……そして、その本人である俺も迫る地面に対して目を瞑っていた……

「あれ？」

一向に来るべき衝撃が来なくて……目を開けてみると確かに、目の前まで地面が迫っていたが、一向にそれ以上地面に俺の顔面が迫ることはなかった。

「あれ？」

不思議に思って身体を起こしてみると……俺の足が地面から二十センチほど浮かんでいる状態であった……あれ？俺ってマジシャンだったかな？

「……」

一向に思い出せないのでどうしたものだろうか？そんなに物忘れが激しいほうだったか？

どんなにうなっても、考えてもまったく持って俺の求めている答えが出てこない……というより、俺って誰だっけ？

「……何とか……零時だったな、うん」

苗字は思い出せないがとりあえず、零時だ。日にちが変わった瞬間に産声を上げたから零時だって誰かが言っていた。

しかし、何故、俺の身体は青白く、半透明なのだろうか？人間というものはそんなものじゃないだろう？確かに、太陽に手をかざして見ればちょっとは透けるかもしれない……スケルトンカラーって子どもにはやりそうだよなぁ……

どうでもいいことを考えていてもしょうがないのでそこらをフラフラ歩くことにする。ここが何処だったのかようやく気がついた。
ここはあれだね、そう、学生さんたちが朝起きたら向かわなきゃいけない場所だ。
うん、学校。
何故、ここに俺が居るのかさっぱりわからないが、とりあえず誰かにあって反応してくれれば俺が誰だかわかってくれるだろう。堕ちてしまった窓からもう一度入り込む。どうやら二階から落ちてしまったようだ。
「だ、誰か居るのか？」
「ん？ちょうどよかった……すいませ～ん」
曲がり角から懐中電灯の光が漏れてきており、その先に誰かがいるのは確定だろう。相手も声が聞こえたようで徐々に身体が見えてきて警備員の方だということがわかった。
しかし……相手は俺を見て、懐中電灯を落とし、その顔は震えていた。
「で、でた～……」
「……」
回れ右して一目散に走り去ってしまった。
「？」
これってあれですか？俺の後ろに何かが居てそれを見て相手が逃げちゃった……って話？つまり、俺も危険ってことか？
油のちゃんと差されていないロボットよろしく、徐々に後ろに視線を向ける……その先に居たものは……夜の闇だけだった。
「……ほっ、驚かせやがってあの警備員め～……」
てっきり幽霊でも出たのかと思ったじゃねぇか。

―――――――

「知ってる？この学校に死んじゃった十時零時のお化けが出るんだって！」
「え？一年前学校で死んでいたって人の？」
「うん！昨日の夜に警備員さんが目撃して大騒ぎだったんだって！ほら、八咲さんのおじいさんが今日の夜にじきじきここに出向くって言ってたよ！」
「じゃ、やっぱり八咲さんも手伝うんでしょ？」
「そりゃ、そうでしょうよ！」

――――――――――――

何だかよくわからんが……そんな話を聞いた……というより、何処もかしこも学校中そんな話でいっぱいだった。何々？八咲って誰？十時零時って名前が俺？
変な話だが、警備員は俺を見て驚いたが誰も俺を見て驚いてはくれなかった……というより、俺を完全無視。目の前で手を振ってみてもスルーされたし、女子トイレ前で待っていても誰も叫び声を上げてはくれなかった。すいませ～んといってこれで何人目になるだろうか……
これで最後にしようと図書館のプレートがかけられている場所へと足を伸ばす。司書の姿は見当たらず、数多くある机の一つだけが埋まっている。机の上には本が山のように積まれていた。相手の姿は確認できない。
「すいませ～ん」
そういうと、なんだか空気が固まったような気がした。これまでとまったく違った反応だったためにもう一度訊ねてみる。
「すいませ～ん！！俺の声聞こえていますかね？」

ガタン！ガタガタン！！そんな音がして、本が崩れ落ちた。その先に一人の女子生徒が居て、俺を見ていた……驚愕……蒼と赤色のパンダを目撃しました……そんな表情をしている。

「あ、よかった……俺の姿が見えるんですか？いやぁ、誰も見えていないんじゃないかと思ってびびって……」

「れ、零時くんっ！！」

「っと？」

気がついてみれば、眼鏡をかけているその女子生徒は俺を抱きしめていた。

え？何これ？俺はこの人のなんだったんだ？

第一話◆：青白くて半透明、ついでに宙に浮いてます。（後書き）

この小説は満月の騎士　～満月の岸にて～の続編に当たるような、当たらないような作品です。主人公である十時零時は死んでいるような、死んでいないようなそんな曖昧な存在です。そんな彼は戦います。説明へたくそなので今回はこの辺で勘弁してやってください。

第二話◆：剣とかぐや姫

第二話
「設定が甘い」
俺は目の前に座っている八咲月子という女子生徒にそう言い放った。
「そんなのあるわけないでしょ～よ。そんな、パラレルワールド的な場所で化け物と戦うなんて……それが原因で俺が死んだなんてさぁ」
まったく、人をからかうにもほどがある。一年前の昨日、俺はこの学校の二階にある生物室で剣に突き刺さった状態で死んでいたなんて……本当、冗談が過ぎるっての。
「本当なの！零時君は死んじゃってるの……」
「じゃ、今の俺は？誰？何？」
「そ、それは……」
じーっと俺を見て首をかしげながら自信なさげに口を開く。
「幽霊？」
「違うでしょ！！」
「あいたっ！！」
真面目な顔で冗談言うたちの悪い子にはでこピンだ。
「あのなぁ、あんた今さっき俺を抱きしめただろ？」
「う、うん……」
何でそこで顔が赤くなるんだ？まぁ、それはいい。
「両腕が俺の身体を貫通しなかった、そして見てくれ……」
俺は右手を頭の上まで上げて、一気に振り落とす……ばんっ！！
という音が静かだった図書館に鳴り響いた。
「身体が机とか貫通しねぇぜ？壁から無理に出ようとしてもぶつかるだけだ」
「そ、そうだね……一体全体何なんだろう？」

首をかしげているが……俺のほうが何者なのか知りたい。
「で、あんたは結局俺の何なんだ？」
「え？」
「あんたの妄想は詳しく聞いたが、あんたが何者かって話はまだ聞いてない」
「私は……私のこと、覚えてないの？」
「私のことを覚えてないのって……俺は自分が何者かさえ、知らん」
なんだかものすごくつらそうな顔をされたし、心に傷を負わせてしまったような気がしたがわからないものはわからないのだ。
「私の名前は……八咲月子」
「なるほど、八咲か」
「……うん。神社の娘で、剣を……」
「確証のない剣の話はもういいよ……で、その話に出ていた剣は？それがないと話できないぞ」
そういうと顔を伏せられた。申し訳なさそうな顔をしている。
「その、剣は……たぶん、家に……」
「よし、じゃあその剣を俺に見せてくれよ」
「それは……無理だと思う」
「何で？」
「……厳重に保管されているし、今日の夜、新しく誰かに手渡すって言っていたから」
「別に見せてくれるぐらいならいいんじゃねぇの？」
その後、俺はあの手この手を使って八咲の説得を行ったのだった。

――――――――

「あら、一体全体何故、あなたみたいな人がここに居るの？」
八咲の家は神社のようなところだった。そんな馬鹿でかい家の巨

大な門の前で、一人の少女に出会った。きっつい眼力の持ち主で性格悪そうな顔をしている。髪は長くて腰の辺りまで伸ばされている。八咲も髪が長いが、後ろで縛られているのでわかりやすい。
まぁ、勿論俺が相手のことを知る由もないので首をかしげることにしていた。
「誰？」
「えっと……八咲伽倶八って言う人」
伽倶八……かぐやねぇ……かぐや姫ってか？こんな性格なら誰からも言い寄られることはないんだろうなぁ……
「……で、あなたはいまさら男を連れてきて仲良くやろうっての？今日、ここで大切な行事があるっていうのに」
どうやら俺のことは見えているらしい。じろっとにらみつけられてしまった。そんなに見つめちゃイヤン♪
「……この人に剣を見せて欲しいの」
「はぁ？馬鹿じゃないの？」
「一瞬だけでもいいから……」
「話にならないわ」
そういわれて門をくぐって奥へといってしまう。
「別に減るもんじゃないだろ、見ても……けちなかぐや姫だなっ！！」
「れ、零時君…それは……」
てっきり家の中に入ったかと思われたかぐや姫は庭に敷き詰められていた玉砂利を蹴散らしながら戻ってきて俺の胸倉をつかんだ。
「……今あんた、何ていった？」
「何だよ？お前耳が悪いのか？」
「いいから、いいなさいよっ！！」
「……別にヘルモンじゃないだろ、見ても……おけちなかぐや姫……げふぁっ！！」
懇親の右ストレートが俺の頬に炸裂。俺はそのまま吹っ飛んで（マジで身体が軽い、飛んでいるようだ）壁に激突……

「いたたた……いってぇな！死んだらどうするんだよっ！！」
「……あんたがかぐや姫なんて呼ぶからいけないんでしょ？……月子、目障りだから消えなさいよっ……」
それだけ言い残すと今度こそ家の中へと入って行ってしまった。
「零時君、大丈夫？」
「……大丈夫じゃねぇよ……くそ、逆に絶対に見てやるぜ、かぐや姫っ！！」
そういうと、何処からか石が飛来して俺の頭を直撃……地獄耳だな、おい。

第二話◆：剣とかぐや姫（後書き）

後書きを見る前の注意：作者は適当なことを言います、気をつけてください。二日連続の投稿！目指せ、皆勤賞！世界は地軸を中心に回っている！！金が欲しい、金が欲しい、金が……ほっすぃぃぃぃっ！！今思えば、あの時ちゃんと告白していればよかった……そうすりゃ、いまだに連絡を取り合っている仲良しこよしの万々歳になっていたはずなのにぃぃぃ……ちっきしょうぉ！いいんだいいんだ、どうせ俺なんか……こうなったらワニワニパニックでストレス発散だ！あのゲーム台、今日こそ絶対にぶっ壊してやるっ！！と、言ってみたい今日この頃。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3296j/

満月の騎士　～死んでも死にきれないんだよぉ！～

2010年10月15日22時16分発行